豊明希望チャペル礼拝

2026/2/8

「罪人を招いて悔い改めさせる為」

ルカの福音書５：27～32

今日の箇所は、当時、ユダヤはローマの支配下にあって、ローマに税金を納めるために設けられた、「取税所」で、イエス様が、レビという一人の収税人に声をかけられ、彼が信仰者になった、その出来事がルカによって描かれている場所です。

ちなみに、この記事は、マルコとマタイの福音書にも書かれています。ただ、ひとつあえてルカの特長をあげれば、ルカは、このレビと言われる収税人に加えて、福音書の後の方で、ザアカイという収税人にも声をかけて、今日の箇所でもイエス様は、この収税人に招かれて、一緒に食事をしているのですが、同じようにと言いましょうか、それ以上に、ザアカイの家に泊まろうとしているとイエス様はおっしゃられて、泊まるのですが、この二人の収税人の記事を乗せていると言うことです。ザアカイの記事はみなさんも聞いた事があると思いますが、実は、その記事は、ルカだけの記事なのです。このように、収税人に声をかけられ、他の奇跡や癒やしの記事では、ほとんど出てこない、一緒に彼らと食事をするという場面をあえて描くのがルカだということです。

今朝、私が特に印象的だと思う聖句を、まず確認したいと思います。それは、最初の聖句です。

「5:27 その後、イエスは出て行き、収税所に座っているレビという取税人に目を留められた。そして「わたしについて来なさい」と言われた。」

私は印象的だと言ったのは、この「私についてきなさい」もそうですが、この「**収税所に座っているレビという取税人に目を留められた**」というところです。もっとも注目したいのは、「収税所に座っている」というこのことです。考えてみれ

ば、ペテロらに、イエス様が、声をかけられて、「私についてきなさい」と言われたのは、ペテロが漁をしているその場所であったと言うことです。

「**5:2 岸辺に小舟が二艘あるのをご覧になった。漁師たちは舟から降りて網を洗っていた。**」27 節で目を留められたとあり、この 2 節でも、「ご覧になった」とありますが、どこで？そこは、彼らのいずれも、仕事場で声をかけられたと言うことであります。

イエス様が、彼らを招かれのは、伝道集会でもなく、礼拝でもなく、いわば、職場であったと言うことです。

ひとつの印象深い経験があります。私の父は、収税人ではありませんが、金融関係、田舎の信用金庫に勤めておりました。父は、私が 27 才のとき、なくなりました。私の実家は、美容院で、母が父と結婚したとき、その美容院の前にあったのが、飯田信用金庫喬木支店で、近かったので知り合いました。母が美容院を、別の場所に出したとき、喬木支店も引っ越してきて、今度は、美容院の横になりました。20 年ほど経ったとき、隣の支店長さんが、応接室に案内されて、なんと数時間もお話しをしたことがありました。なんでそんなに、話が長くなったのか。その支店長さんが父と一緒に働いていたと言うことがありましたが、それ以上の話でした。実は、彼の一人娘がキリスト教の信仰を持って、キリスト教の団体に就職してしまったのですという相談でした。

同じ、信用金庫の支店長同士の、その子ども達が、キリスト教徒になったという話だったのです！不思議な偶然です。それで、支店長としての人事の事、仕事での悩みのことなどもお話ししました。

母は、そんな話を息子と隣の支店長がしたことに驚いていましたが、その後、支店長さんと話をすると、「教会に行くようにしたい」と言われたとか。

実は、そのあと、その支店長さんは、娘さんに、先輩の同僚の息子が、牧師に

なっていると話されて、その娘さんから、お手紙をいただき、彼女が、東京のある教会で伝道師をしていること、そして、このように書かれていました。

「神様が、（父を）あわれみ、働いて下さっていることを知り、驚きと感謝でいっぱいです。・・郷里のために定期集会を持ちたいと願っています。昨年暮れから祈って計画しているのですが・・・はじめの一歩を踏みそこねている状態です」と。

不思議でした。彼女こそが、お父様の救いのために祈っておられた。私は、それで、イエス様から、お父様のところに遣わされたのだと考えました。

今日の話と、強引に結びつけるわけではありませんが、もし、イエス様が私を遣わされたとすれば、講壇の上からでもなく、教会でさえもなく、彼の仕事の真っ最中、その仕事場のど真ん中で、イエス様が私を通して、というより、イエス様が、証しをされたのだと感じたのです。

ルカが、ペテロらを漁の最中(さなか)で招かれ、レビが、取税所で招かれたことを、あえて語っておられるとき、イエス様が、彼らの職場の、あるいは生活の糧を稼ぐ、まさに、彼らの働き場であっても、導かれたこと、イエス様は、そういう事をなさる方だ、そういう事がお出来になる方だと言っているのではないかと、すくなくとも、そのことを見逃さないで、伝えているのだと言うことを思うのです。

私たちは、時に、仕事を離れて、教会に来て、イエス様のお会いするのだと勘違いすることがあるのかも知れません。しかし、あなたの家庭はもとより、職場、仕事場の、事務の部屋のその場所で、同僚と、きわめてこの世的な、お金や、物の話をしている、そのところにも、イエス様は出かけてこられている、おられるのだということ。そして、必要とあれば、その場で、その職場での、あなたの隣人に、愛を注ごうとしておられる、福音を伝えようとしておられる(実際に、あなたが、伝えられるかどうかは別としても・・)と信じる事が出来ると言うことではないでしょうか。

さて、そんな事も念頭におきながら、なお、続きの箇所を見ていきます。今一度 27 節と、28 節を読みます。

「**5:27 その後、イエスは出て行き、収税所に座っているレビという取税人に目を留められた。そして「わたしについて来なさい」と言われた。5:28 するとレビは、すべてを捨てて立ち上がり、イエスに従った。**」

この箇所で、マタイとマルコと違い、印象的なのは、「目を留められた」という表現です。マタイとマルコでも、「ご覧になって」という言葉が加えられていますが、ルカのギリシャ語は違っていて、非常に詳しく目を留めるといいましょうか、食い入るように見られたという意味にもとれる強調した言い方になっているように感じます。

イエス様は、特にレビに関心を強くもたれたと言う事です。

この後、パリサイ人達がイエス様を非難する噂(うわさ)、あるいは独り言のことが出てまいります。ある意味では、この、イエス様が、特にこのレビに心をとめられ、食事まで一緒にするほどに、いわば関心をもたれたという、そのことに、なぜなのだろうかと、今、私たちが今朝、問題にした、ルカの、この強調、イエス様は、

特に関心を持たれた、なぜかと、その問を、同じく問うていると言うことです。続きを見てみましょう。そして、イエス様の、それに対する、お答えも併せて見ます。

「**5:29 それからレビは、自分の家でイエスのために盛大なもてなしをした。取税人たちやほかの人たちが大勢、ともに食卓に着いていた。5:30 すると、パリサイ人たちや彼らのうちの律法学者たちが、イエスの弟子たちに向かって小声で文句を言った。「なぜあなたがたは、取税人たちや罪人たちと一緒に食べたり飲んだりするのですか。」5:31 そこでイエスは彼らに答えられた。「医者を必要とするのは、健康な人ではなく病人です。5:32 わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためです。」**」

聖書の専門家である、パリサイ人や律法学者が、「なぜ」と問いました。イエス様に直接たずねたわけではありませんが、互いになぜだろうとつぶやいていました。

なぜ、イエス様は、彼に目を留めたのだろうか、そして、目を留めて、食事を共にするほどに、親しくされようとしているのか、どうして？彼以外に、いくらでも、目を留めるべき人はいるのではないか？たとえば、私たちパリサイ人や律法学者など、聖書の専門家である我々、我々こそ、イエス様と対等に、面白い聖書の話しが出来るかも知れない・・・よりによって、収税人と！？そんな気持ちだったのかもしれません。

当時は、収税人は、異邦人ローマのために働くので、収税人＝罪人という考えがあったようです。また、ザアカイの時にも出てきますが、ごく当たり前に、その税の一部を自分のふところに入れていたようだという点でも、盗みであり、それが、たとい給料の一部とみなされていたとしても、やっぱり、そんな汚い仕事をするのは、罪人の仕事だと思っていたようです。

私たちは、「なぜ」と問うとき、イエス様が、なぜ、このレビに、そんなにルカが強調するほど目をとめたのか、また、目を留めるだけではなくて、一緒に食事をするほど、関係を築こうとされたのかということについて、どう考えるのでしょうか。このレビは、後の伝承では、マタイの福音書を書いたマタイであるとされています。

イエス様は、ギリシャ語に堪能で、知識の深いこの人物を、将来、福音書を書く、重要な人物として目を留められたと言うことでしょうか。あるいは、金勘定も、計算も得意ですから、何かと役に立つと考えられたのでしょうか。だから、特に目ととめられたのだと。

イエス様は、いずれも違うと、御自ら、答えを出されているのだと思います。

将来、12 使徒の一人になるためでもない、聖書を書く人となるためでもない、弟子達の群のために、金勘定をさせるためでもない、なぜか。

それは、彼が罪人だからだというのです。

「**5:31 そこでイエスは彼らに答えられた。「医者を必要とするのは、健康な人ではなく病人です。5:32 わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためです。」**」

パリサイ人達よ、私は、あなたと神学論争をするためにきたのではない。まし

て、彼(レビ)が、福音書を書くためでも、群の経済を管理させるために、彼のところに来たのではない。彼が罪人だから来たのだ。その一点だと言われたのです。

もちろん、イエス様が、彼が罪人だから来たと言われるのは、であれば、パリサイ人は罪人ではないのか？という疑問にもつながるかもしれません。

罪人を救い、赦す、イエス様は、また、そのイエス様の役割は、収税人レビにも、パリサイ人、律法学者にも、同じく必要でした。

ただ、一つ、パリサイ人らとレビが違うのは、同じ罪人でも、レビが、自分が罪人であると言うことを知っていたと言うことがあると思います。彼が、病人であると自覚し、医者を求めていた、健康ではないと心得ていたと言うことです。正しくなく、罪人だと、心得ていた、あるいは悩んでいたと言うことであります。

イエス様が、目を留めたのが何かと、あらためて問うとすれば、彼が、自分は、不潔、不健康な者で、自分の罪に悩み、悔い改めても赦されるかどうか、ほとんどあきらめていたような人間であったからだというのが正解かも知れません。

イエス様は、私たちを見るとき、何に一番、関心があるのでしょうか。彼は、神の国に役立ちそうだから、能力がありそうだから、心が優しいから・・それではないということです。彼が、どうしようもない罪人だから、その罪を脱することが出来ないから。そんな彼に、あきらめるな、私ならあなたを救うことが出来る、やり直し、新しい人生を歩みなおすことが出来ると言って下さるためであります。

今朝、イエス様が、レビという人間に目を留めて下さった場面を見ました。ここに箸にも棒にもかからないような罪人がいる。でも、私は彼を救える。私についてきなさいと、イエス様が、彼の軽蔑すべきその仕事の真ん中にいて下さって彼を導き、彼と共に歩んで下さり、食事をしてくださった場面を見ました。

十字架の贖いの主は、私たちを、その職場で、家庭で、人生の最中(さなか)で、導き、愛し、赦して下さいます。この週、そんなイエス様に導かれながら、悔い改めと、イエス様に従う信仰を持って、むしろ、証の歩みを歩みたいと願います。